

---

いつか...

ko-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
いつか…

【Nコード】  
N2038C

【作者名】  
k o -

【あらすじ】  
27歳OLの切ない恋…でも一生をかけて守りたい恋を綴ります。運命だと信じた相手は既婚者。それでもお互いが魅かれあう…求め合う…葛藤を描いた小説です。

## プロローグ

例えば：すごく急な坂道を必死で登って頂上に見える雲を手にした  
いと願う。

手にはいるかもという、かすかな期待を胸に登っていく。

でも：いくら近くに見えても、雲は掴めないのに。

恋も愛も似たようなものかもしれない。私が何を犠牲にしても何を  
捨てても思っただ恋は

2年間の時を経て突然、やってきた。

きたくら あやね  
北倉朱音

27歳。OL。中小企業に勤めて10年目：

いわゆる可もなく不可もない日常を送っている。

合コンだ！彼氏だ！なんて騒いでいたのは遠い昔で今では『お局』  
なんて呼ばれる立場で

仕事と新入社員の教育・上司の嫌味をこなす日々…。

27歳にもなると、恋にも億劫になってくるもの。

簡単に好きだ！愛してるなんて言葉より結婚っていう現実が迫って  
きて気が重くなるばかり。

それに、最近、よく考えることがある。

世の中の女性は2種類の人種に分けられると思う。

『肉食系』 『草食系』…

『肉食系』は不思議子ちゃんや天然子ちゃん・甘え子ちゃんではつ  
とけないとか守ってやりたいなんて言葉が男の口から決まって飛び  
出てきて、それをGETできる、いわば特する人種。

『肉食系』は正反対！自分でできるだろう？一人でも大丈夫だよな  
？甘えさせてくれるよな？的なイメージを勝手に男に持たれてしま  
う、いわば損する人種。

実際、肉食系の方が根本的に草食なんだよな…

とっている私も現実には肉食系。合コン・飲み会に出れば盛り上

げ役。自虐ネタなんて言っただけで自分を落して回りをもりたてる。笑いを取るのが基本的に好きなのに…肉食な自分が嫌いではない。そんな私だって過去に恋人はいた。けれど、結婚したい！と切望するような相手ではなかった。

むしろ今の自分が大切だった。妥協できない若さがあった。おかげで27際だけど…

職場でも頼られる存在になれたのは嬉しいけど、その立場を築いてきた今までの道を後悔はしていないけど…でも、肉食は草食よりは本当は淋しがりやで甘えん坊で誰かに頼りたいと思うもの…

私はそうだ…だから、時折ふと泣けてくる時がある。

晴れた日の高い空に浮かぶ雲を見て涙…

雨の日の窓につく雨雫を見て涙…

私の奥底で開こうとしている感情があった…

2年も封印したはずの想いが…

27歳になって、自分を見直した時に弱っている自分を見つけた。

恋をしたいと切望している自分が裏側にいた…

封印したはずの想いを解き放つてもいいだろうか…

## 第1章 出会

2年前 11月。

冬の足音もそこまで聞こえているというのに、コートなしでも歩けてしまうくらい

暖かい日だった。

いつものように6:30に起きて、しばらくボーっとしながら顔を洗って髪を整えて

ちよつと仕事モードに入ってきたら戦闘モードに入るために更に仮けし面めんを

つけて。一杯のコーンクリームスープを飲みながら今日の占いをチェック。

なあんだ…最下位か。でも、ここが私の性格のいいところ…ん？悪いとこと？単純？で、

上位の運勢は信じるし占い師が言ったアドバイスをなんか実行してみたり…

だけど、一転して悪い結果の時は信用する気ゼロ。いつも同じ占い師の結果なのに、

この世にみずがめ座なんて何人いるんだよ！全員に該当するかって…なんて悪態つきながら

玄関まで。でも、案外、良くない運勢の事があたる時が多いんだよな。

なんて、ぶつぶつ考えながら電車に。でも、今日な何となく最下位でも嫌な気がしない。

変な気分…と考えてるうちに会社到着。

はあ…今日も一日はじまるかって社員通用口を一步超えてみる。そこは戦場との境界ライン…

職場に入って一服する間もなく、

『今日から新入社員が来るから』

唐突な上司の一声だった。

…へえ、意外！…この会社は通常、人員が減ると補充するというスタンズだったから、

一定したこの時期に中途採用するなんて、よっぽどの実力者？

まあ、私の会社は設計業だから技術屋さんなんていたにこしたことはないし、この世の中

あらゆる顧客の要望にこたえて仕事をものによつと思つたら、やつぱりいろんな考え方や

スタイルを持つ技術陣がいた方がいいもんね…

なんて、結構いろんな考えが巡らせながら、でも昔みたいに新入社員ドキドキなんて感覚は

ゼロで…年とつたな…

現実的な事ばかりを考えて紹介をまつた。ドキドキというより仕事を一緒にできるといふ

新しい風にワクワクしていた。

『おい、ちょっと集合』上司の更なる一声に駆け出すその瞬間…

トウルルル

電話かよ…

周りを見れば、新米たちは”新しい人ってどんな人”みたいな出会いを楽しむ顔で集合

しちゃってるし、仕方ないか…それも。

なんて思いながら受話器をとる。

『はい、K&I設計ですが…。いつもお世話になります。その説はどうも有難うございました』

私のお客だ！って対応しながらも上司の紹介してる様子に耳をかたむけながら…

ああちよつとそこ見せて。その隙間から！どんな人？？？

『はい、では午後から伺いますので。有難うございます。はい。よろしく願います』

と受話器を置く瞬間、その輪の隙間から見えた！

釘付けだった。なんだろう…この感じ。一目ぼれをする年でもないけど…

なんだろう…この感じ。この人だ！って私の心臓が言ってる気がする。

なんだろう…この感じ。

『はい、これからよろしくね。ああ北倉くん電話終わった？』

上司に呼ばれるまま、吸い込まれるように人だかりの中へ歩いていた。

目が離せなかった。彼も私を見ている、同じ感覚で見ている。そんな気がした。

『今日から一緒に働いてもらう杵崎充くんだ』

『お願いします。いろいろ不慣れな事でご迷惑をおかけするかもしれませんが』

彼の目が私を見ていた。彼の視線をはずす事ができなかった。

なんだろう…この感じ。彼の声が遠くで心地よい音楽のように聞こえていた。

その時、

『杵崎くんは2児のパパなんだ。県外で結婚されて、30歳を迎えたのを機に帰ってきたという』

具合だよ。』

悪魔か…この上司は。一気に現実だった。

なんだろう…この感じ。なんでもないじゃん！

私もとうとうイカレタのかしら。白昼夢までみるなんて。

そうだよね…現実にそんな！！運命の出会い！！なんてあるわけないんだって。

ちよつと夢みすぎた…

何が彼も同じ感覚で見ているよ…ああ恥ずかしい！！

『はい。お願いします。』

私は、今までの自分を隠すように恥ずかしさを見破られないようにあっさりした返答で

その場を乗り切った。  
これが、彼との出会いだった。

## 第2章 予兆

雲が風に押されて流れてゆくように…

ただ…ただ…流れてゆくように…

私の日常も流れている。

意味もなく、心もないまま…

ただただ時間に押されて流れてゆく…

杵崎さんとの出会いから4ヶ月がすぎた。

いつもと変わらない朝の1コマ。

『今日の占いは…2位か！いいね～。えっと、心ときめく出来事があるでしょうか』

ないね…

なんて、笑いながら玄関まで。ヒールに片足をつっこんで。

『あっ今日は花見だっけ。じゃ、スニーカーだな』

街路樹の桜がきれいに咲き誇っている。

いつもは2駅分を電車にのって戦場へと向かう私も、さすがにこの季節は、

ゆっくり歩きながら…そうだな、戦場の病院へいく気分！！

しんみりした感じじゃなくて、戦場の病院って看護師さんがいてち

よっと気分が休まりそうな

イメージじゃない？そんな感じ。

両脇の桜がトンネルになって、そんな道を歩いて空を仰いでみる。

特に今日はスニーカーだから、気持ちも上昇だな。

風が吹いて薄紅色の花片をふわふわと流してゆく…

花片が私の頬にとまって、手で押さえた瞬間、4ヶ月前の気持ちがふと首をもたげた気がした…

杵崎さんの手にこの花片を乗せてみたい、そう思った気がした。

『変だな、今日は』

季節の情緒に流されたな…

しっかりしろ。朱音。さあ！会社を目指して！今日は花見だ。

しっかり仕事して飲むぞ！

どうしてだろうか…

ふとした瞬間に彼の事を考えるのが癖になってきていた。

なんだろう…

若い時のように、好きだとか、その瞬間に全てのエネルギーを注ぎ込むような情熱は

ないにしても、何だかずっと気持ちが穏やかに彼の波にのって流されているような…

ただ、杵崎さんの事を自然に意識している自分に気づいた朝だった。でも、気づいた事に気づかないふりをして蓋をした朝でもあった。

私の性格は、ストレートというか逃げない性格だ。

良くも悪くもある事だと言われるけれど…

思った事は話してしまう、伝えてしまう。

気になる事はそのままにできない、相手に真っ向から立ち向かう。

相手と必ず真正面から向き合う。

そういう性格…だから、時には傷ついたりダメージをつける事もあるけど。

でも、自分に正直に生きる事がモットーだ。

といつつ、恋愛にはかなり臆病で…。

だから、この朝も杵崎さんへの気持ちを押しさえ込んでいた。

一日が始まった。

この日はさすがに仕事の後の一杯を楽しみにしてか、活気が違う。私も仕事に追われる一方で気持ちは浮き足立っていた。

午後の仕事も片付いてPM5:30

終礼を終えて、いざ出発。

行きのタクシーで後輩の河田風香が

「こういう行事の時って、私服が見れるから楽しみなんですよね。そう思いませんか？その人のセンスがわかるっているか。

杵崎さんの私服って今回、見るの初めてじゃないですか。まだ若いし楽しみですよね」

と言いながら、かなりアンテナをはっていた。

なるほどな…。そういうところからも情報を収集するのか…

なんて考えながら、私の後ろのタクシーに乗っている杵崎さんを想っていた。

いろいろ想像を膨らませながら。

と、目的地に到着。支払いをすませてタクシーからおりると、彼も同時にタクシーからおりてきた。

「普通ですね。杵崎さん。なあんだ」

風香がちよつと残念そうにそう私の耳元でつぶやいた。

何を期待してたんだか…と思いつながら彼のほうに視線をそっと流した。

ズキン。胸が締め付けられる。

私の想像…というか好みというかバツチリだった。

今になって思えば、杵崎さんがあの時、例えどんな服装をしていても私の胸の痛みはおこっていただろう。

彼なら何でもよかったのだと思う。

ただ、あの時の私にはあの胸の痛みが、偶然ではなく必然に思えて、  
彼を特別だと思う

私を呼び起こすサイレンのように聞こえたのだ。

### 第3章 嘘

花見は毎年変らずの風景だ。

飲んで話して笑って泣いて…

いろんな表情がいろんな場面で見え隠れし、私も泣いて笑ってはじけて

仕事の時から想像できないなんて言葉をよく耳にするが、本当に私を含め、上司・同僚は

こつも変貌するものかと驚くほどである。

人間、<sup>かせ</sup>枷が外れた時の自分の解放の仕方をよく心得てるなとしみじみ思う。

そうして、また明日に向っていくのだ。

と、飲んで笑って騒いでとしている間にも私の肩は杵崎さんを意識して止まない。

どうしてだろうか…

みんなが、場所を移動しながら、いろんな人たちとの会話を楽しんでいる。

杵崎さんの周りには興味をもった若い女の子達の輪がきれることはない…

私は…といえは、その輪には入れそうもなく、ただただ意識だけがとんでいる感じだった。

2時間くらい経っただろうか。幹事の一声で一瞬、ざわめきが静寂にかわる。

「えーみなさん。宴もたけなわではございますが、一次会はこのへんでお開きに」

二次会を用意していますから、時間のある人はぜひ参加を！！」

静寂は『二次会』の一言にまたざわめきに変る。面白いものだ。と、そそくさと私の隣に風香がやってきた。

「先輩、二次会どうします?」

「ん、明日、休みだけど仕事に出ようと思ってるし、顔だけだして帰るかな」

「じゃ私も一緒にしますね」

こんな打ち合わせはOLの間では結構常識である。

ん、長いものにはまかれるみたいな…後輩は必ず先輩に「どうします?」ってお伺いをたてに

やってくる。先輩も先輩で後輩にあわせたり、とにかく1人で突っ走るとは極力避けるために事前に打ち合わせをするのだ。

男性陣にはばれないように。しらけるからね。

と、そんな話をヒソヒソとやっていたら、急に耳元で別の声。

えっ！なに?

「朱音さん、どうするんですか?」

《朱音さんってなに?名前で呼ぶって…》

そう、声の主こそ杵崎さんだったのだ。しかも耳元でやめてよ、風香がすかさず返す

「私たちは二次会にいきますよ。杵崎さんはどうするんですか」  
杵崎さんは風香にはニコリと微笑みを返しただけで私の方に顔をむけなおすと

「いや…全然、今、話できなかつたし朱音さんとじっくり話してみたいと思ってたんで。」

「じゃ、よかつた。二次会は隣に座りましょうね」

と言って《とつか言うだけ言って》また輪の中に戻っていった。

「えー…杵崎さんて先輩の事、お気に入りなんですわ。何かちょっとドキドキしますね」

と人事をすつかり楽しんでる様子の風香だ。

有り得ない！！！ちよつとのドキドキどころじゃないよ！！！！有り得ない！！！！

二次会に行くという事を言った事を後悔してるのか、二次会に行く事を簡単に漏らした風香に

怒りをぶつつけたいのか、とにかく私の頭はパニックだった。

でも、口うまいよな〜って冷静に客観視している自分もいたりした。冷静朱音を優勢にさせてパニック朱音をとりあえず背後にまわして、二次会へ挑む事にした。

ふりまわされたくない…そんな事を考えながら…

宴会の会場から外にできれば、ほろ酔い気分の似たような同士たちがふわふわと群れていた。

みんな、解放された時間を楽しんでた。

そんな中で私は最後の扉をあけずにむしる鍵をかけた。

自分の気持ちには正直に、逃げないをモットーに生きてきた私だけど…

開放できる扉を制限する術も社会にでて身につけた。

だから「杵崎」という扉は決してあけないと心に誓った。

桜の花びらが風にゆれてふわふわと空を舞い、暖かな時間の流れを演じている。

けれど、時折吹く4月のまだ冷たい風に頬をうたれて私は正気にかえるのだ。

正気…違うな。

嘘を重ねていくのだ。自分に嘘を…

ほら、また一つ鍵をかけるたびにその扉は嘘で塗られていく…  
鍵をかけたようで、いつか開いてくれるのを待っているのに…

そう誓って頑な（かたくな）に自分を守っていた頃が今はなつかしい…

哀しみも切なさもやるせないのも今は多くを抱えてしまったけれど、  
あの頃の私に比べたら…

そして、間もなく杵崎さんと私に少しずつ変化が訪れるのだった…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2038c/>

---

いつか...

2010年10月20日11時41分発行